

あの出会いから四百年

400年以上の悠久の時を経て息づく上野の伝統
1602年、福智山麓でその歴史は幕を開けた：

◎ 忠興と尊楷が築いた礎

千利休のもとで侘び茶の奥義を極めた細川忠興・文禄・慶長の役で招致された李朝陶工・尊楷。この二人の運命的な出会いによって歴史の扉は開かれました。開窯に選ばれた場所は福智山の麓、上野。「関ヶ原の戦い」で功を挙げ、豊前小倉藩主となった細川忠興（三斎）は、1602年（慶長7年）、この地に尊楷を招いて築窯させます：上野焼の始まりです。



尊楷は、地名にちなんで上野喜蔵高国と名を改め、古田織部と

並び讃えられた利休七哲の一人である「三斎好み」の格調高い茶陶を献上し続けました。細川家の藩政は約30年間という短い統治でしたが、この間に上野焼の確固たる礎が築かれたのでした。

細川忠興 1563-1646

安土桃山時代から江戸時代前期の武将、大名。号は三斎。信長、秀吉、家康に仕え、関ヶ原の戦功により豊前・豊後39万9千石を所領し、豊前小倉細川藩初代藩主となる。知勇兼備の名将で茶湯や文芸に通じ、千利休の高弟として七哲の一人に数えられている。茶道三斎流の祖。父・藤孝（幽斎）も当代随一の文化人として名高い。（画像：永青文庫所蔵）

尊楷（上野喜蔵） 1565-1654

熊本県の八代市にある上野焼開祖・尊楷（上野喜蔵）の墓。1632年（寛永9年）、尊楷は藩主・細川家の移封（国替え）に従って肥後熊本へと移る際、子の十時 孫左衛門と娘婿の渡 久左衛門を上野の地に残し、上野焼の存続につなげた。尊楷は肥後の地でも八代焼（高田焼）を創始した。忠興（三斎）が亡くなると即座に仏門に入り、宗清と名乗る。1654年、89歳の生涯を閉じた。



◎ 守り抜かれた伝統の炎

細川氏にかわつて小倉城に入城した小笠原忠真もまた、文武に優れ、茶道に精通した藩主でした。上野焼はこの小笠原家のもと、藩寮として庇護され、幕末まで守り



継がれていきます。やがて明治維新後の廢藩置県で小笠原藩がなくなつた後、上野焼は二時的に途絶えたかのよう

に思われましたが、1902年（明治35年）田川郡の補助を受け、熊谷九八郎により再興されました。その後、土と炎に挑む陶芸家が続々とこの地に白煙を立て、上野の炎は完全に再燃されます。昭和58年には国指定の伝統的工芸品となり、20軒の窯元が点在。長い伝統から生まれた多彩な技法を駆使し、各窯元が陶技を磨き続けています。数々の苦難を乗り越え、幾世代にもわたって伝統を守り、昇華させてきた先人たち。4百年を越える悠久の歴史には、その計り知れない労が、深く刻まれています。



小笠原忠真 1596-1667

豊前小倉小笠原藩初代藩主。細川藩2代藩主の細川忠利と義兄弟にあたる。母は徳川信康の娘・登久姫。徳川家康のひ孫にあたり、九州探題の任を兼ねたといわれる。礼法や茶道に通じ小笠原古流を興した。（画像：広寿山福聚寺所蔵 / 北九州市立自然史・歴史博物館提供）



遠州七窯の一つ

上野焼は徳川将軍家茶道指南役の大名茶人・小堀遠州ゆかりの国焼で、遠州好みの茶陶「遠州七窯」の一つとして伝えられています。遠州は、千利休、古田織部と続いた茶道の本流を受け継いだ日本三大茶人の一で「綺麗さび」という華麗で優美な茶風を創り上げました。

【遠州七窯】志戸呂／膳所／朝日／赤膚／古曾部／上野／高取



小堀遠州 1579-1647

近江小室藩主で江戸初期の大名茶人。号は孤篷庵。従五位下遠江守であることから「遠州」の名で呼ばれる。王朝文化の理念と茶道を結びつけた「綺麗さび」の茶風を確立し、茶道具で遠州が鑑定したものは「中興名物」と称される（利休時代の名品を「名物」、それ以前の名品を「大名物」という）。建築や造園にも優れ、その万能さから日本のダヴィンチとも称されている。（画像：大徳寺孤篷庵所蔵）



1602-
豊前
小倉・上野

1632-
肥後
熊本・八代